

# 国際理解のとらえ方

## ーバージニア・ウィリアムソン小学校での事例からー

東大阪市立荒川小学校 教諭 高井延子

### (1) はじめに

このプロジェクトに参加させていただくにあたり、非常に興味関心があったことから、「国際理解教育」に関する内容であった。個人的には日本における小学校英語活動に関わっての調査段階である。

第15期中央教育審議会の答申の「国際化と教育」において

- (1) 広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- (2) 国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
- (3) 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

に特に留意して教育を進める必要があると提言している。自己を確立しつつ、異なる文化を持った人たちと共生していくために必要な資質や能力を身につけていくことが求められている。

また「国際理解」については、日本ユネスコ国内委

員会が出してる『国際理解教育の手引き』で国際理解教育の指導の原則のひとつに

「すべての民族、その文化、文明、価値及び生活様式（国内の民族文化及び他国民の文化を含む）に対する理解の尊重」

という項目がある。

まだまだ国際理解教育についての個人的勉強は進んでいないのが現状であるが、では「異文化を知る」ということは、子どもたちにとってはどういうことなのだろうか、自分が異文化を伝えるメッセンジャー的役割をしていく中で見えてくるものがあるのではないかと考えた。こういった視点から授業をさせていただき、またバージニア・ウィリアムソン小学校の取り組みを通して国際理解について再考する貴重な機会を与えていただいた。

### (2) 研究の概要

- ① 「日本」(異文化) を伝える。
- ② 少数民族の個に応じた学習について
- ③ 異文化理解のとらえ方

### (3) 授業の流れ

<指導案①>

日時： 2002年8月21日(木)

場所： 4年生教室 Ms. Baker's Fourth Grade Class (男子6名・女子12名 計18名)

ねらい： 今の日本の街を知る。

児童の活動	支 援	準 備 物
・日本の場所を知る。	・世界地図で日本とアメリカの位置を知らせる。	世界地図 日本地図
・グループに分かれ、新聞広告をみて感想を書き留める。	・思ったこと、感じたことをメモしておくように指示する。	新聞広告 パンフレット メモ用紙
・街の様子をビデオで見る。	・簡単な説明をつける。 信号機 高田駅(自動改札) 祭りの前日	ビデオ(15分)

	マンション街 プラットホーム うどんや 喫茶 自動販売機 ショッピング街 (浴衣、花や) スーパーマーケット (入り口、レジ、 ジーンズ売場) 味ののれん街 (陳列ケース、鯛細工、 ピアノ、パフェ、洋食) お好み焼き (店内の様子、作り方) マクドナルド 駅前通り	
--	--	--

<指導案①を終えて>

地図からまず自国と日本の位置を確認し、そして対比させたかったが、4年生では難しかったようである。新聞の折り込み広告を持参して感想を求めたのだが、こちらの予想と反した部分は、品物の値段に注目していたことである。「これは、USドルだといくらになるの。」と質問していた。また、車にはとても興味を示していた。これはノースカロライナでは、「16才になると

運転免許がもて、自分一人で行動できる。」つまり一歩大人に近づいたという自覚になるという話と関わっているのかもしれない。

しかしほぼこちらの予想通りの反応で、「子どもは子ども、日本と変わらないな。」というのが感想である。ビデオの食べ物のシーンでは、「お腹が減った。」「食べたいなあ。」というような反応が返ってきた。

<指導案②>

日時：2002年8月21日(木)

場所：4年生教室 Ms. Baker's Fourth Grade Class (男子6名・女子12名 計18名)

ねらい：日本の小学校を知る。

活 動 の 内 容	準 備 物
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本の小学校」クイズをする。</li> <li>・10の質問に「yes, no」で答える。(各自に解答用紙配布)</li> </ul> <p>質問</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①学校へは、バスに乗って来ている。</li> <li>②校舎は平屋建てである。</li> <li>③普段は、一人ずつ机とイスに座って勉強している。</li> <li>④みんな同じようなカバンを持っている。</li> <li>⑤各教室にテレビがある。</li> <li>⑥学校にはプールがある。</li> <li>⑦昼食は、学校で作る。</li> <li>⑧昼食は、ふつうはランチルームで食べる。</li> <li>⑨昼食は、みな同じものを食べる。</li> <li>⑩掃除は、普段大人がしてくれる。</li> </ol>	解答用紙
<ul style="list-style-type: none"> <li>・VTRで確認していく。</li> <li>・紙鉄砲を作り、遊ぶ。</li> <li>・感想を書く。</li> </ul>	メモ用紙

<指導案②を終えて>

指導案①に続いてすぐに授業を行った。ビデオを見

る前に「小学校クイズ」をしていたので、興味をもってビデオを見ていたようである。自分たちの学校とは

違う点が多かったようであるが、日本人教師の立場として特に興味深かった子どもの反応は、「教室に先生がどうしていないの?」という質問であった。日本では、始業前の職員打ち合わせの時間中、教室は子どもたちだけの時間となり、自分たちで朝の会を進めたり、一人ひとりが勉強をしていることがほとんどである。その点ウィリアムソン小学校では教室に先生がいないということは、あり得ない事態で、とても不思議にうつったようである。

もう一点意外な反応は「くつを履き替えている。」場面がウィリアムソン小学校の子どもたちにとってはとても不思議にうつったことである。日本では外靴と上

靴を履き替えるのは当たり前であり、個人的には何の違和感もなかったのでこの点を指摘された時には、文化の違いを強く意識した場面であった。この背景には、生活様式の違いが大きくかかわってくるのだが、一言では説明できない部分であろう。

長時間にわたる授業で子どもたちにも負担をかけたようである。折り紙はウィリアムソン小学校の子どもたちにも人気があったが、気分転換の意味もこめて持参した「紙でっぼう」を披露した。これは、予想通り大騒ぎとなり、ベーカー先生にはとても迷惑をかけてしまった。折り方の説明をした後子どもたちと一緒に楽しむことができた。

<指導案③>

日時：2002年8月22日(金)

場所：4年生教室 Ms. Baker's Fourth Grade Class (男子6名・女子12名 計18名)

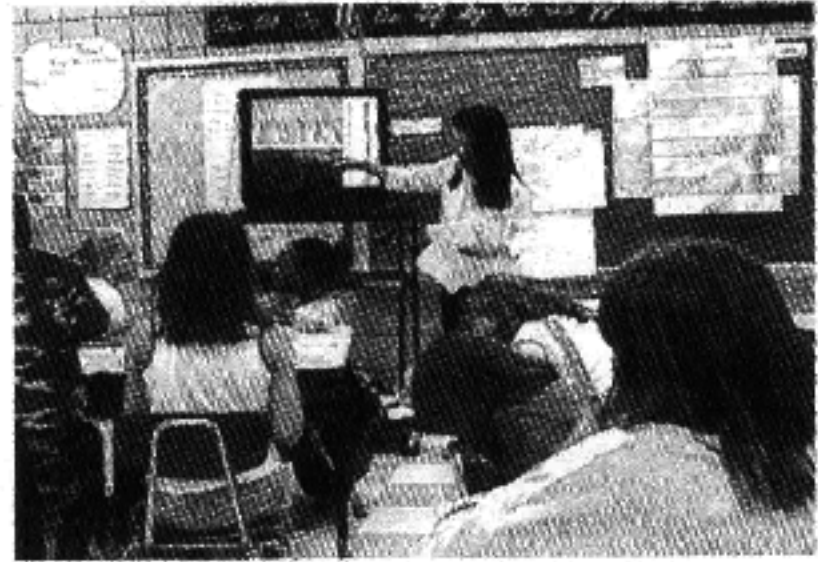
ねらい：日本の文字(漢字・平仮名)を知る。日本のお菓子を知る。

児童の活動	支援	準備物
<ul style="list-style-type: none"> <li>・象形文字から漢字を知る。</li> <li>・「山」の絵を描く。</li> <li>・絵と文字とを想像して組み合わせる(黒板で)。</li> <li>・文字には、漢字、平仮名などあることを知る。</li> <li>・自分の名前を見る。</li> <li>・日本のお菓子を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の文化について知らせる。</li> <li>・児童に紙を配り「山」の絵を描くように指示する。</li> <li>・自分たちの描いた絵が「山」「川」「月」「日」のどの文字であるか想像させる。</li> <li>・4つの漢字がこれらの絵の意味を表していることを知らせる。</li> <li>・漢字から平仮名が生まれたことを知らせる。</li> <li>・五十音表を配る。</li> <li>・前日に児童の名前を確認しておき、紙にかいて準備しておく。</li> <li>・ラムネ、おかき、キャンディ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵を描く紙(人数分)</li> <li>「山」「川」「月」「日」</li> <li>五十音表</li> <li>名前カード</li> </ul>

<指導案③を終えて>

翌日の授業となった。前日は、ビデオ中心の授業であったので、子どもたちがもっと参加できる授業をと考え漢字の学習をした。簡単な象形文字を紹介したが、ほとんどすべての子どもたちが予想した通りの結果となり、漢字に興味を持ったようである。漢字か

ら平仮名が生まれていった経緯も少し話をしたが、つたない英語では十分に伝えることができなかった。しかし、事前に準備しておいた平仮名の個々の名前のカードは喜んでいた。日本のお菓子の試食時には、おかきに巻いてある「海苔」がどうしても食べられなくてそれをはがして食べていた子どもが2人いた。



授 業 の 様 子

#### (4) まとめと考察

全部で指導案を4時間分準備していった。まず初めには「現在の日本」を紹介したいと考えた。時間に制限があったため、外国人にとって特に奇異に感じるであろう「日本」の部分は、最後に示す予定であった。しかし結局時間が足りなくて4つめの「日本の伝統文化（能・雅楽・侍）」の紹介と「日本のアニメ・TV番組」の紹介の授業ができなくて残念であった。

①と②の授業の後にかいてもらった子どもたちの感想には、18名中8名が、「将来日本に行きたい」「もっと日本のことが知りたい」「日本語を学びたい」という具体的な記述がなされ、日本に対し強い興味を持っていたようである。

授業を終えてから、クラス担任のベーカー先生に「自分たちと同じだと思った点」「違うと思った点」を中心に子どもたちに感想を書かせてもらった。

その中で特に目立った点についてまとめると

##### ※相違点

- ・プール学習
- ・運動場
- ・掃除
- ・生活習慣の違い（靴を脱ぐ）
- ・登校の仕方

##### ※共通点

- ・算数の勉強をしていること
- ・学校で勉強していること
- ・運動場で遊ぶこと

子どもたちの感想には相違点、共通点ともいろいろな視点から書かれていたが、全体から受ける印象はとも日本に興味をもち好感をもっているという点であ

る。食べ物、文字、また小学校生活にしろ日本という国が子どもたちの意識の中に位置づけられているのは間違いないと思う。

「子どもにとって異文化を知るといふことはどういうことなのか。そこから何を学んでいくことが大切になってくるのだろうか。教師にとって何を学ばせることが大切なのだろうか。」という研究テーマを持って参加したプログラムであった。初めに構えていた自分がいてもこれも伝えたいと準備したが、子ども達は、日本の学校の先生が学校内をうろうろとしている。そういった環境に接しているだけで、日本を感じ違和感もなく素直に受け入れている。そんな柔軟さに富んだ存在であるということに改めて感じた。これは、教師として構えてしまっていたなと反省する部分である。小学校段階であるがこそ異質なものをスポンジに水がしみこんでいくようにどんどん受け入れられていけるのかもしれない。また、このプロジェクトが始まって3年目に入り、そのことが大きな影響を与えているのは言うまでもないように実感した。こういった継続的な交流こそが、相手や、その文化、その価値、生活様式に対する理解の尊重につながっていくのだと感じた。異文化を知るといふことは、時間がかかるものかもしれないが、国際理解につながるものだと確信する。ここで使っている「文化」とは、ある意味でとても狭い意味での文化であるかもしれないが、こういったつながりがどんどん進められていくことは、大きな財産となり、これからの社会をになっていく子どもたちにとって必要とされる分野であろう。

少数民族の子どもへの対応も個に応じてきめの細かい部分で指導がなされていたように感じた。母語がスペイン語であるため、英語の理解力に差のあるメキシ

コから来た女の子の授業を参観させていただいた。週に2回、35分の授業で、1対1の指導がされているようだ。英語を話せない両親のもとでの問題点は日本でも同じで、子どものほうが外国語習得が早く、文化や言葉が壁になっていると言われていた。

アフリカンアメリカン、ネイティブアメリカンに関する教育についての話を聞くにまで至らなかった。

また課題解決的な学習については、ウィリアムソン小学校では参観できなかったが、後日訪れた、エクスプロリスのチャータースクールでは、環境問題や人権問題についての授業がされていた。

キャラクターエデュケーションのプログラムもあり参観させていただいた。ホームステイ先で教会に連れて行っていただいたのだが、アメリカでは教会が、一種道徳教育の場として大きな存在であるような気がした。

勉強不足で「文化」のとらえ方がまだまだ不十分であるのだが、アメリカでの教育は、国際理解といった場合に、それを特別な時間、教科というとらえ方ではなく、すべての授業を行うときに、多文化的な視点や教材を入れて指導されているのではないかと感じた。音楽の教科書をいただいたがその内容は日本とは大きくちがっているように思う。たとえば3年生の教科書

の“CLASSIFIED INDEX”のページを開けてみると<FOLK, TRADITIONAL, AND REGIONAL>として数十の国別、African American, Native American, United States に分類されている。それに対して日本では、国際理解を独立した領域としてとらえているのではないだろうか。この意識の違いが、「異文化理解について」「国際理解について」どんな取り組みがなされているのかというこちら側の質問に対して明確と感じない返答しか得られなかった理由の一つであると考えている。この背景には、その国の様々な事情があり、その中から生まれたカリキュラムであるからであろう。

簡単に日本とノースカロライナの比較はできないが制限のあるわく内で、それぞれ子どもたちの置かれている環境や現状を把握し、よりよい教育の在り方を追求しようとする教師の姿は共通していると思う。

#### (5) 終わりに

ほんの数日の滞在で深くはわからないが自分自身まだまだ勉強不足だと感じる部分が多くあった。今回の研修してきたことをもとに、いろいろな視点から今後とも研究を続け、日本における異文化理解について国際理解教育のあり方について考えていきたい。

## 国際理解教育の指導について

### ーヴァージニア・ウィリアムソン小学校の訪問を通してー

東広島市立御蘭字小学校 教諭 森重章子

#### (1) ヴァージニア・ウィリアムソン小学校を訪問して

初めての訪問日。その日は快晴だった。期待と不安でいっぱい私は姉妹校のヴァージニア・ウィリアムソン小学校（以下、VW小学校）へ向かった。

VW小学校はゴルフ場の入り口付近にあるため、とても見晴らしがよく、自然が豊かである。登校は保護者が連れてくる他、8台のスクールバスに乗ってやってくる。登校後、簡単な朝食を食べ、自分の教室へ行く。家庭の事情によって朝食を食べて来ることができない児童のためであるらしい。

教職員数は80名、児童数は約560名である。驚いたことは、教員以外のスタッフの数である。教員が35名に対し、スタッフは45名である。それぞれ専門のパートで仕事が決めており、他の仕事をすることはない。事務やランチの職員の他に、ペンキ塗装や植木の手入れの専門まである。

小学校での歓迎は、想像を遙かに超える手厚いものだった。歓迎式ではステージ上に笹を飾り、「たなばた」の合奏及び合唱後、短冊を結びに行くという日本古来の行事を取り入れてもてなしてくれた。また、書道や絵画等、日本からの児童の作品やプレゼントを廊下に掲示したり展示したりしているコーナーが大きく作られていた。廊下を歩いていると、児童から「コンニチハ」「サヨナラ」と日本語で挨拶されたり手を振ってくれたりする姿が大変多かった。

どの教員もとても熱心で、自分の授業を見に来てほしい、日本のことを話してほしい、折り紙を子どもに教えてやってほしいと言われた。訪問中の3日間は「日本デー」と言ってもいい程、どのクラスでも日本のことを取り扱った授業が多かった。例えばパソコンの授業でパソコンを使って漢字や平仮名を書いたり、図書館の授業で日本のことを記述している本を探したり、歴史の授業ではアメリカ人が書いた日本を紹介する本を基に調べ学習を行ったりしていた。井の蛙ではないが、他の国から日本の国を見ることで、「日本はこのように見えるんだ。」と、大変興味深く参観することがで

きた。

#### (2) 学校運営について

VW小学校のカリキュラムは、ノースカロライナ州が作成したカリキュラムを基に行われている。日本のように国が作成したものはないが、必要性の声があがっており、数年後にはできるかもしれないらしい。実際にECの大学の教授が訪日して、日本のカリキュラムについて勉強したそうである。また、テストについても同様で、現在は州のテストを使っているが、5～10年後には全国统一テストができるかもしれないそうである。

効果のある学校を創っていくための心構えとして、ハリー・マーチン校長は次の3点を挙げている。

- 教職員の意見をよく聞く。
- 校長と副校長の信頼関係を築く。
- 教師の言動をしっかり認めていく。

また、児童の質を高めていくためには

- ① 年間計画を作成（主要教科の教員が立て、アシスタントの教員におろす。）
- ② 学年部会の充実（児童の課題に対しての手立て）
- ③ 教師の活性化（やる気を出す、指導力を身につける、スキルアップの研修）
  - ・教職員間の決まり（やらなければならないこと）を守っていく。
  - ・成果に対して互いに賞賛し合う。
- ④ 他者に対する校長自身の接し方（見本となるように）

が大切であるとも述べていた。このことはアメリカのみならず、日本においても大事なことであると言えるだろう。

#### (3) 国際理解教育の進め方

- ① 自国及びESL (English as Second Language) 学習について

自国理解においては、まず国旗や国歌に対する教育

は年少の頃から行われる。VW小学校でも教室には国旗が掲げられ、朝は必ずアメリカに対しての忠誠文を復唱する。愛国心はこのようにして養われていくのかもしれない。

授業では、低学年で自分のことを、4年生で州のこと、5年生で合衆国のことを学習する。この点は日本も似たところがある。

ノースカロライナ州では、学校の児童数に対し、決まった比率で黒人の児童を入れなければならないという法律がある。そのため、どのクラスにおいても約半数は黒人の児童であった。教室においてある人形や掲示物にも様々な人種の物があつた。他人種が多く住んでいることもアメリカにとってはごく当然のことであり、自然に自国の特徴として受け入れられるのであろう。

また、ESL学習においては、校内でしっかり行われている。VW小学校では、現在2名の児童がESL学習の教室に在籍している。週に2回、別々にマンツーマンで授業を行っている。今回参観した授業は、英語が分かりにくいスペイン系児童への指導であつた。A・B・C…とアルファベットを復習していきながら、つまづいたところでは単語を思い出させたり、発音をはっきりと何度も言わせたりしていた。その後、プリントを使って、リズムや形が似た単語同士を組み合わせ、短い文を作つた。

ESL学習で力を入れていることは、理解力だそうである。大抵このような児童の両親は英語を話すことができないようで、学校での授業が重要になってくる。児童は覚えが早く、全く話すことができなかった児童でも、1年後にはセンテンスをつなげて短い文章を作れるようになった。ここでの英語のテストを合格すれば、教室から卒業し、自分の教室で他の児童と同じように受けることができる。ただ、両親が英語が分からないことを利用して、親の前で聞かれたくないことや都合の悪いことは英語で話すといった使い分けをする児童もいるらしく、教師はこの点が問題だと述べてい

た。日本でも同様のことがあり、私が受け持った児童の保護者からもこのような声が聞かれた。

## ② 異文化理解について

異文化理解については、日本以外の国においても積極的に行われているようである。今回見ることができたのは2年生の総合学習「メキシコのことを知ろう」という取り組みである。Readingの時間にメキシコの本を読んだことがきっかけで、調べ学習や体験学習を行っている。例えば、パソコンの授業でウェブサイトを使い、メキシコの文化や衣食住等を調べたり、絵や国旗を描いたりした。またゲストティーチャーとしてラテンアメリカにいた人の話を聞いたり、遠足を利用してメキシカンレストランに行き、食事をしたりした。あらゆる教科や活動を総合的につなげて取り組む例であり、とても参考になった。

## (4) 今後の交流計画と課題

御薮宇小学校では、平成12年度にVW小学校と姉妹校提携をしている。その後は、グローバルパートナーシップ(GPS)を通じて、本校へ教員が来校したり、本校から教員が渡米し、交流を深めたりしてきた。3年間のGPSを終え、これからの交流は教員同士だけでなく、児童の間でも交流していけたらと考えている。本校では今年度20台のパソコンを導入した。少しずつパソコンを使っての学習を取り入れている。また5年前から国際理解教育の一環として英語学習にも取り組んでいる。そこで、このパソコンを使い、VW小学校の児童とインターネット交流をしていきたいと考えている。また「Mojiko」を利用すれば、低学年においても絵等を送り合うこともできるであろう。課題としては、児童の会話力である。本校の教員がどこまでサポートできるかが大切になる。また交流を長く継続させていくのならば、校内の協力体制も整えていく必要がある。この3年間を無駄に終わらせないためにも、ぜひ取り組んでいきたい。

# 自己表現力及び心の育成における指導法の比較

東広島市立御薗宇小学校 教諭 森重章子

## (1) はじめに

本校は英語学習を中心にした国際理解教育を推進している。これから先、国際社会の中で生きていく子どもたちにつけたい力は、自分の考えをもちそれを相手に伝える力、相手の思いを受け止められる力、いわゆるコミュニケーション能力の育成ではないだろうか。

しかし、実際の私は本校に赴任してわずか2年。今まで英語とは無縁の生活をしてきただけに、私自身がコミュニケーション能力が身に付いていないのではないかと感じてしまう。いい経験をすれば子どもはぐんと成長する。これは今までの教員経験の中でいつも感じていたことである。そうすると私もこのGPSを通じて、直にアメリカの空気に触れ、風景や現地の学校の様子等を見てくれば、何かが変わるきっかけになるかもしれない。そう思い、私自身の成長の旅として上記の研究テーマを掲げ、参加した。

## (2) 研究の概要

### ① 自己表現力を高めるための指導法

本校では、コミュニケーション能力を高めるための一つの手立てとして、自己表現力の育成にも重点を置いている。自己表現力といっても様々な手段がある。例えば、言葉（短文、長文、詩等）で表す、絵や工作で表す、発表する等が挙げられる。そこで、今回は図画工作と国語を中心に課題追求することにした。

図画工作では、「こんな〇〇があったらいいな」という題で太陽、月と星、魚のどれかを選んで描くという

設定で、私が受け持っている児童に描いてもらい、それをアメリカの児童に見せて感想を聞いたり、同じ設定で実際に描いてもらうという取り組みを行った。授業をどのように組み立て、進めていくのかを知りたかったため、私は授業の観察に徹した。その後、担任と美術専科の教員に質問したり、他の作品を見せてもらったりした。

国語では、授業見学をしたり、担当の教員に質問をしたりした。また、日本とアメリカの授業形態や教科書を比較し、指導法の違いを探った。さらに、学習発表の場の設定と方法についても同様に行った。

### ② 心の育成（道徳的指導）について

ある時、本校に来ているALTから「アメリカには道徳的教育の時間はない。」と教えてもらい、驚いた。学校では国語や算数といった学習を教える場であって、道徳的教育は家庭や教会で教えるものらしい。

確かに日本でも家庭や地域の中で教わることは多いし、必要なことである。では、学級内でケンカや怠け、差別的発言等が起こった場合、教師（担任）はどう対応し、子どもに指導していくのであろうか。このような声が他の教員からも聞かれた。日本ならば絶対にそのままにはしない。教育活動全体において、個人や学級全体に指導していく。

そこで、実際に現場の意見を聞き、道徳の時間に代わるものがないかどうか調べることにした。日本の指導との違いも比較していくことにした。

### ③ 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関 (所属・所在地・連絡先等)
8/19 (月) 8:30	Williston Middle School	学校施設見学 授業参観 質疑応答	Principal: William A. Hatch Williston Middle School Of Math, Science, Technology 401 South Tenth Street Wilmington, NC28401 (910) 815-6906



11:00	Gregory Elementary School	学校施設見学 授業参観 質疑応答	Gregory Elementary School Of Science Math and Technology 319 South Tenth Street Wilmington, NC28401 (910) 251-6185
14:00	Ashley High School	学校施設見学 授業参観 質疑応答	Principal: Hugh Brady Ashley High School 555 Velerans Drive Wilmington, NC28412 (910) 790-2360
8/20 (火) 9:00	Virginia Williamson Elementary School	学校施設見学 3日間の打ち合わせ・準備 授業見学 全校児童による歓迎式	Principal: Harry Martin Virginia Williamson Elementary School 1020 Zion Hill Rd Bolivia, NC28422 (910) 754-8660
8/21 (水) 22 (木) 8:00	Virginia Williamson Elementary School	課題追求のための調査 質疑応答 授業見学 授業参加 (21日:教職員による歓迎会)	Virginia Williamson Elementary School 1020 Zion Hill Rd Bolivia, NC28422 (910) 754-8660

### (3) 研究の結果と考察

#### ① 自己表現力を高めるための指導法について

##### ア 図画工作を通して

授業は同じ2年生で行ってもらった。ウィリアムソン小学校では、国語や算数といった主要教科外は専科の先生が指導している。日本の公立小学校において、低学年はほぼ、担任が全教科指導する。私がお願いした授業も図工の先生が行った。

まず導入部分では、クレヨンの特性について話し、今日の課題について説明した。その後、下絵や色つけと進んだが、わずか30分程度で終了してしまった。

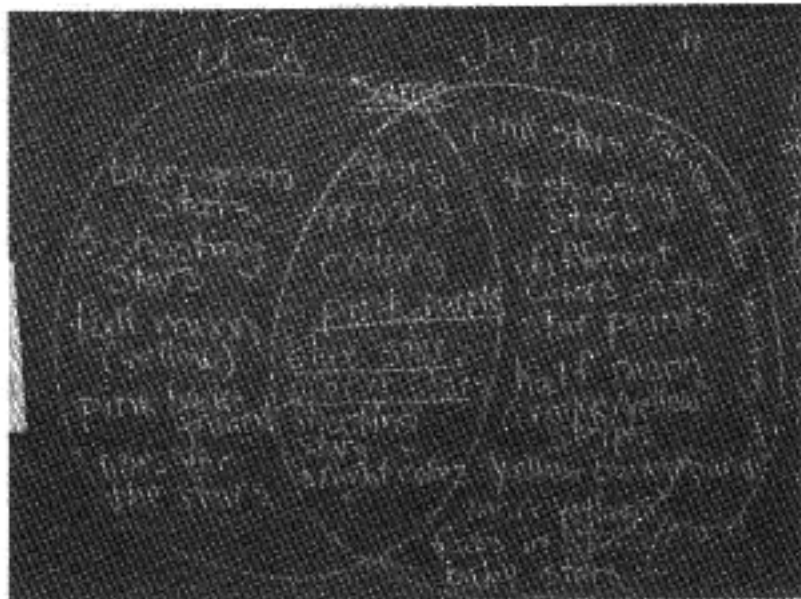
授業を見て驚いたことは、まず、自分の絵の具用具を持っておらず、教師が配るものを2～3人で共有しながら塗っていた。絵の具の色は8色程度で白がない。筆は小筆（細筆）のみである。塗り方も単色塗りが多く、日本で見られる混色はほとんどなかった。日本で



図工の授業風景



月と星を描く子ども



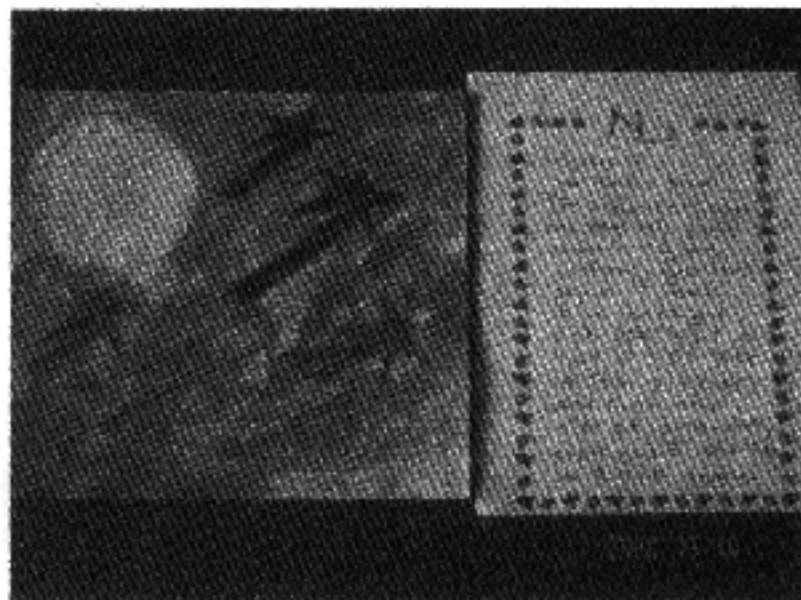
日米の比較

は、大概自分の絵の具用具を持っており、絵の具も12色が主流である。筆は大・中・小の3本程度使っているだろうか。

そして、時間の短さである。日本では、一回の授業にかける時間は1限45分の2限分である。また単位によっては、四～六校時かけて作るときもある。この短さでは、子どもも十分に表現できないのではないかと思ひ、その理由を尋ねた。そもそも、図工は週に1限の45分しかなく、その中で仕上げなければならないらしい。「今回は特に時間が無く、30分では確かに子どもがイメージーションを働かせきれていない。あなたが持参した絵のように、2校時分時間をかけて取り組めば、もっといい作品ができる。だから今回は2つの作品を比較しないでほしい。」と言われた。

確かに私が思っていたものと違い、比較することができない。どうしてなのか、何が違うのか。そう思っていたところ、担任の先生から興味深い話を聞くことができた。

まず、国語（特に作文）に重点を置いているという点である。担任の考えとしては、図工は、頭をリフレッシュさせて、他の活動（国語）につなげていくスタートのようなものであるらしい。つまり、その時間に作った作品を題材にして文章を書かせるための一つの手段、文章の想像力を引き出させるための一つの道具なのである。今回も、図工の授業後すぐに国語の時間があり、日本と自分たち（アメリカ）の作品の違いについて比較しあい、それをプリントに文章で書いていった。では、図工の先生はどのように思っているのか。尋ねてみると、図工（アートの要素）と国語の表現力両方の向上をねらっているらしい。例えば、教師の方である程度（最低限）のものを作っておき、子どもにそ



月と星の絵とプリント



5年生「11月」のクラステーマ

の続きを想像させて作らせたこともある。話を聞いていく中で、図工の先生としては、アートのイメージーションや技術力を少しでも向上させていきたいと思っているように感じた。

ウィリアムソン小学校では、学年毎に各月の学級のテーマがあり、それを達成させるために主要教科外はどのような内容のことをすればいいか決まっていく。あくまでも主要教科、特に国語が中心ではあるが、互いに連携しあい、よりよく発展させていくためのシステムが確立しているように思う。しかし、個人的に担任の先生の思いと図工の先生のとらえ方（思い）に微妙なずれを感じた。また、図工の先生の思いを達成させるには、時間が不十分のような気もする。小学校全体が国語、特に読み書きにおける表現力育成に重点を置いているためか。

#### イ 国語を通して

では、国語ではどのような取り組みがされているのだろうか。一つの例として「自分の名前から生まれたペット」を取り上げてみようと思う。



担任の名前を使って見本を作る

まず、図工の授業で自分の名前を素に想像上のペットの絵を描く。次に国語の授業で3段階に分けて文章に表していく。第一に、どのようにして自分のペットになったのか、その過程を文章で表す。第二に色や形、目、手、鼻等、物理的な説明を文章で表す。第三にそのペットは何をするのが好きか、何をやりたがっているのか等、ペットのパーソナリティを文章に表す。一つの図工作品から三パターンの文章が生まれるのである。アメリカの小学校では、国語は大きく「Reading」（物語文教室）と「Writing」（文法教室）の二つから構成され、それぞれ独立して行われている。日本では、一つ（年間を通して上下の2冊）の教科書を使い、その中にほとんどのことが仕込まれている。「Reading」では教科書を使い、読むことを中心に読解力や読み方（抑揚や感情、強弱等）を養っていくが、「Writing」では、教科書はなく、法を中心に進められていく。いくつかの文法的な型があり、その型を教え、その中でいかに自分の思いを書いて表現していくかに重点が置かれている。例えば、シラブル（単語の分節）を使って、1シラブル、2シラブルと増やしながらか詩を書い

ていく。また、教師が提示した言葉をいすから立ったり座ったりしながら、一つ一つアルファベットを発音していくといったゲーム感覚で行うやり方もある。「Writing」の目的としては、音節を認識するとともに、文法と質の高い表現力の向上をねらっているのである。「Reading」の教科書の大きさは、日本のものと比にならない程大きいし分厚い。教科書は原則として郡の持ち物であり、子どもは借りている。家に持ち帰ることはなく、この点も国から無償で支給され、毎持ち帰る日本との違いであろう。

#### ウ 学習発表の場の設定

表現力を育成する他の手段として、日本では発表の場を設ける機会が多い。そのことを尋ねてみると、5年生の社会科の例を紹介してくれた。「JAPAN」という日本を紹介した本を基に、いくつかのグループに分かれ、紹介したい内容を決める。そして、グループ内で発表したい内容を画用紙2枚分の紙に絵や文章で書き表していく。後日、互いに発表し合う。また、音楽の授業で日本の「たなばた」の合唱を合奏を練習し、歓迎式典の場で発表した。

また、自己表現を育成するために、幼稚園の頃から人前で発表する機会を多く設けているようである。例えば幼稚園では、自分の好きなおもちゃを持ってこさせ、なぜ好きなのか等説明させる。小学校では、クラスで何を習ったか、何をしているか発表させる。また、クラスの朝の会で日直が連絡事項を言ったり、言いたいことがある者に友だちの前で発表させたりする。全校放送では、当番の子どもが予定やニュースを言う。この時、教師は聞き手に徹することで、子どもは自分のことを大切に思ってくれていると感じ、学習意欲も上がるらしい。このような取り組みは日本でも見られ、



教科書の違い

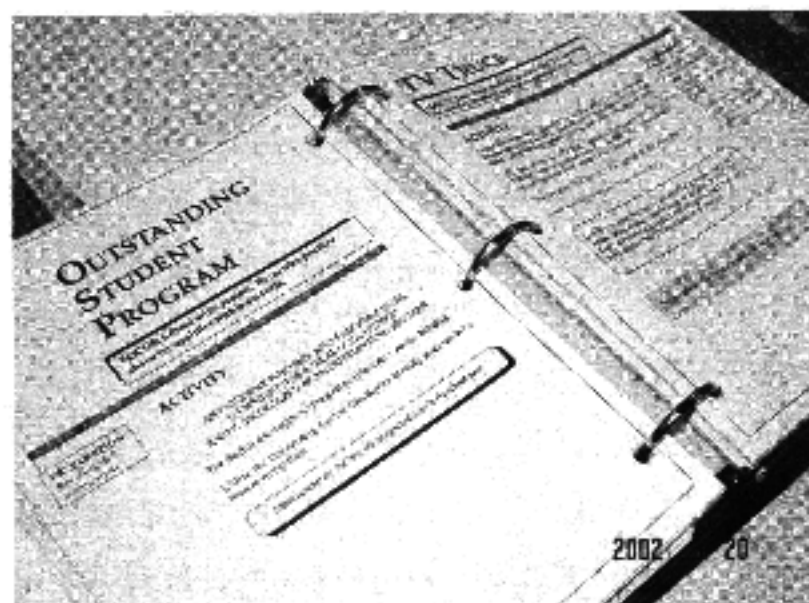
発表の場をしっかりと設けることの大切さを痛感した。

## ② 心の育成（道徳的指導）について

近年、アメリカでは人格の形成を目的とし、学校内でキャラクターエデュケーションという、いわゆる道徳の時間を取り入れている。主にカウンセラーの先生が行うようで、学校によっては様々な方法で行われている。例えば、グレゴリー小学校では、キャラクターエデュケーションに対し、各学年のカウンセラー用の手引き書があり、それを基に行われている。またウィリアムソン小学校では、隔週1回、45分間（幼稚園は40分）カウンセラーの先生によって行われる。今回参観させてもらったのは、4年生のキャラクターエデュケーションの時間であった。都合で図書館司書の先生が行っていたが、図書室で『King of the Pond』という本を読み聞かせながら、“What goes around, comes around. (因果応報)”について考えさせていた。子どもはじゅうたんの上に座り、自由な格好で聞いていた。読み聞かせが終わった後、机に座り直し、「How do you feel when someone is mean to you? (誰かが自分にいじわるをすれば、どう思う?)」という課題で自分の気持ちを文章に書いていた。

日本では、子ども一人一人に副読本が配られ、その本を基に道徳の時間を進めていくことが多い。もちろん、新聞や身近で起こった出来事等、副読本以外のものから考えていくこともよくある。週1回、45分間行われる。価値基準やねらいも明確にされており、発達段階に応じてきちんと内容が仕組まれている。しかし、アメリカでは、まだ位置づけがはっきりとされておらず、どの時間に当てはまるのかよく分からない部分も多いようである。

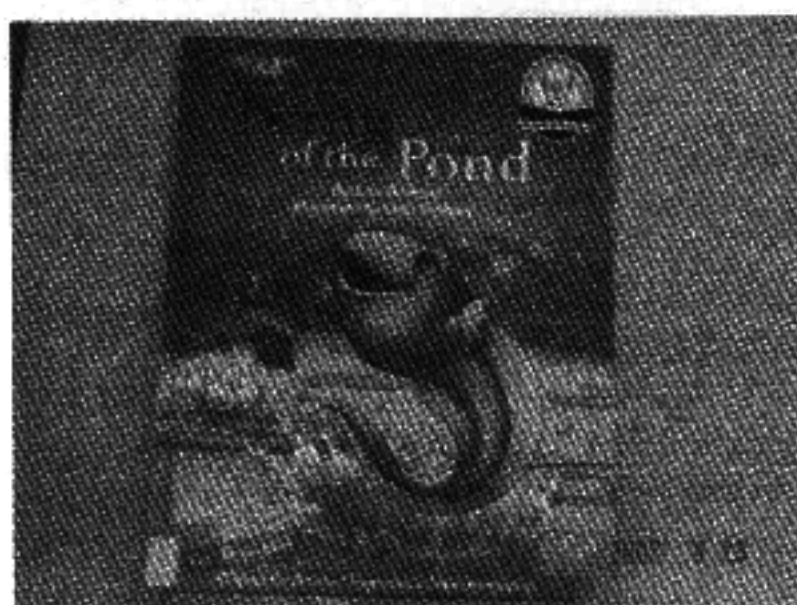
大阪グループの先生方とミーティング等で話し合っ



カウンセラー用手引き書



図書室での実施



King of the Pond

た結果、アメリカと日本の根本的な違いの一つに、アメリカでは主に学力や自己表現を重視し、日本では主に人格形成を重視しているのではないかと、という点が挙げられた。確かに日本では昔から「智・徳・体」や人格形成に関わった言葉（格言やことわざ等）が多い。学校生活においてもマナーやルールの大切さをことある毎に教えているように思う。一方アメリカでは、学力向上とともに論理が優先されており、いかに自分の思いを言葉で表現し、伝えていくか、自己主張ができるかが重要とされる。この違いがキャラクターエデュケーションにおいても、少なからず影響しているのではないだろうか。

## (4) 今後の展望

図画工作においては、とらえ方の違いはあるにしても、題材や他教科への関連付けはとても参考になるものがあつた。私の学級でもいつかぜひ取り組んでみたいし、学校の中でも紹介していきたいと思う。

キャラクターエデュケーションにおいては、これが

ら先どのように変化していくのか研究するのにいい材料である。今後のGPSに参加される先生に引き継いでいけたらと思う。

今回の訪問で、教員も子どもたちも日本についても興味を抱いていることがわかったし、姉妹校として大切にしてもらっていると感じた。これからの交流では、もっと姉妹校の小学校のことを紹介していけるように、さらに学校の環境整備に努めていく必要がある。また教員間のメール交換に留まらず、児童間でのメール交換にも発展させていきたい。また、MOJIKOを使っての絵やイラスト等の交換も行えば、低学年でも簡単に取り組めるので、ぜひ活用していきたい。

#### (5) 終わりに

初めは正直言って、このGPSの参加に消極的だったのだが、今では参加して本当によかったと思っている。アメリカの風土と様々な人との出会いとふれ合いによって、私は大いに変わることができたと感じている。ただ一つだけ残念なことは、会話力がもう少し(いやうんと)あれば、現地の人々とより心が通じ合い、相手を理解できたのではないかと思う。楽しさもさらに感じられたことであろう。正しく本校で取り組んでいる英語学習に、コミュニケーション能力につながっていると感じる。

これからは、児童のみならず私も含めて英語学習を通しての国際理解に励んでいきたいと思う。